

ひとまち

新鮮を、食卓へ

川越は県内有数の野菜の産地。高品質な葉物野菜などが、県内外に出荷されています。この「川越野菜」を市民の皆さんにも味わってもらおうと、農家の皆さんが販売する朝市（農産物直売会）が行われています。平成21年から、クレアパークで毎月第一土曜日に開催しています。農政課の呼びかけで始まったこの朝市。農家の皆さんで組織する朝市組合による、新たな試みが始まろうとしています。



7月7日に行われた朝市の様子
この日は7軒の農家が約20品目の農産物を直売



●「川越プチマルシェ」を配布中！

市内の農産物直売所や農産物を販売している農家など36店を掲載した、庭先販売マップ「川越プチマルシェ」を作成。農政課・市役所受付・公民館などで配布しています。



朝市の魅力は「お客さんの声」。買う側も「生産者の顔」が魅力です。

地産地消を推進する取り組みの一端として始まった「クレアパーク朝市」。当初は参加する農家の確保にも苦労するほどでした。「いまままで販売したことがないので、最初はどうかお客さんに接すればいいのか、分からなかったです」と話すのは、組合長の戸田大輔さん（29歳・下松原）。回数を重ねるうちに参加する農家が増えてきました。3月に発足した朝市組合には14軒の農家が加入しています。

昨年2月、朝市に初出店した横山一栄さん（62歳・かし野台1丁目）は「親が農家だったので農地の維持管理は必要だったんです。出店する前年の9月に会社を退職し、家庭菜園の延長のような感覚で農業を始めました。だから、初めのうちはうまく作物が作れませんでした」。知り合いの農家などに教えてもらいながら、ようやく販売できる品質のものを作れるように。広報で朝市の存在を知っていた横山さんは、直接農政課に相談し、出店することに



畑でキュウリを収穫する横山さん。「朝収穫した新鮮なものを、皆さんに食べてもらいたいですね」



夕市の品数や量を相談する朝市組合の皆さん

になりました。「直売の良さはお客さんの声を聞けること。『こんななのいい？』と言われると、作りたくなりますね」。さまざまな意見や調理法などを聞くことができる直売で、お客さんとの交流を楽しんでいます。

朝市組合の皆さんが発案した試みの一つとして、7月21日に夕市を実施。午後5時から7時の2時間に500人近くが訪れ、行列ができるほどに。用意しておいた試食を提供する間もないほどの大盛況でした。「まずは続けていくことで、多くの人に朝市を知ってもらいたいです。これからは組織の拡大と販売方法の工夫が必要と考えています」と戸田さん。朝市組合の挑戦は、始まったばかりです。

クレアパーク公園夕市…8月18日(土)・9月15日(土) 午後4時30分～6時30分
クレアパーク公園朝市…9月1日(土) 午前8時～10時 ▼10月6日(土)・11月3日(祝) 午前9時～11時

誕生！川越マイスター



川越大好き人間を増やしていくことを目的に、5年目を迎えた小江戸川越検定。2月に行われた試験で、初めて1級合格者が誕生しました。7月2日に行われた合格証書授与式には、24人の合格者(うち22人が市内在住)のうち21人が参加。「川越マイスター」の称号とピンバッジなどが贈られました。最高得点で合格した神山節夫さん(66歳・山田)は「妻が市街地の商家に住んでいたの、川越のまちや歴史に興味を持つように。今では友人に頼まれてガイドをすることもあります」。川越マイスターは今後組織化し、さまざまな活動を行う予定です。



元気に大きくなあれ



人や赤ちゃんの無病息災を願う「初山」が行われました。子どもや赤ちゃんの額にはんこを押すこの催し。「自分が子どものころは毎年のように来ていました。子どもができて、また来るようになりました」「引越して初めて来ました。いいお祭りですね」。昼ごろから夜まで、多くの親子連れが訪れていました。

6世紀ごろに造られた円墳の上に建てられている仙波浅間神社(富士見町)。7月13日、妊娠した



ひとまち
ふおとこニュース



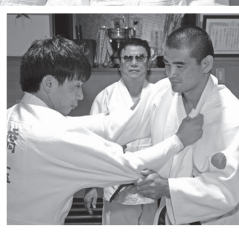
行って 会って 体験
気になるイベントや人を紹介

小江戸ある寺

ひとまち



上：左から加藤さん、高橋さん、牛窪さん
右：練習の様子。つり手を体に密着させています。



楽しんでむために、頑張る二人の晴れ舞台
ロンドンオリンピック後に行われるもう一つのオリンピック、パラリンピック。視覚障害のある柔道家・牛窪多喜男さんが開設する牛窪道場の門下生から、加藤裕司さん(33歳・朝霞市)と高橋秀克さん(42歳・富士見市)のロンドンパラリンピック出場が決まりました。加藤さんは前々回のアテネ以来2回目、高橋さんは初出場です。視覚障害者の柔道は、経験が第一。加藤さんは中学生から、高橋さんは小学4年生から柔道を続けています。小さい頃から目が良く見えなかった二人にとって、柔道は「楽しみ」であり「自信」であり「打ち込めるもの」。「何でも自分でしないと柔道はできない。柔道

があつたから、日常生活ができるようになったんです」と加藤さん。パラリンピックに出る視覚障害者のうち、付き添いなく歩けるのは柔道の選手ぐらいだそうです。見えない相手との戦いは、多くの困難が伴います。「ビデオなどを見て準備をすることができないので、相手の特徴などが分からないまま試合をすることがほとんど」と高橋さん。試合中の相手の動きはつり手(えり)を持つ手で捉えます。「つり手を相手の骨に当たると、体の軸の動きが分かるんです。足の動きも予想できますよ」。目で見ないため、フェイントにかかるともならないそうです。「最後の晴れ舞台かもしれないので、家族の前で頑張っている姿を見たいです」と高橋さん。「良い試合をして、悔いが残らないようにしたいです」と加藤さん。「勝つことも大切だが、柔道を生かして人生を楽しく過ごしてほしい」と牛窪さん。ロンドンパラリンピックでの目標を聞くと「金メダル」と言い切る二人。競技は8月下旬に行われる予定です。大舞台での活躍を応援しましょう！